

「大伴旅人を送る歌」

1、大伴旅人は九国三島（現・九州と壱岐・対馬・種子島）を統治し、我が国の外交・貿易の窓口であり、かつ西の防衛の任にあたった地方最大の役所であることから「遠の朝廷」と呼称された大宰府の帥（長官）として神亀四（727）年末か翌年春頃に赴任したとされる。

2、大伴旅人に帰京の命が下ったのは、在任三年目の天平二（730）年十二月に大納言（右大臣に次ぐ高官）に昇任して、都に帰ることになった。

3、帰京直前に大伴旅人のための送別の宴が書殿（ふみどの大宰府の文書館との説もある。）にて開かれたが、その時に筑前の国守であった山上憶良が作った饞別（はなむけ）の次の四首の万葉歌がある。

あま
1）天飛ぶや 鳥にもがもや 都ま

まを
で 送り申して 飛び帰るもの

巻五―876

（解説）空を飛ぶ鳥でありたい。都まであなたをお送りして飛んで帰ってくるものを。

2) 人もねの うらぶれ居るにを

たつたやま みま

龍田山 御馬近づかば 忘らし

なむか

卷五―877

(解説) あなたが帰京の道にのぼられて人々がみな悄然としているのに

難波(大阪)から大和(奈良)へと越える龍田山に、御馬が近づい

たならば、あなたはわれわれのことをきつとお忘れになるでしょう。

3) 言ひつつも 後こそ知らめ

とのしくも さぶしけめやも

いま

君坐さずして

卷五―878

(解説) 今はあれこれ言うけれど別れた後でこそ、よく分かるでしょう

あなたがおいでにならなくなったなら、随分淋しいことでしょう。

4) 萬代に 坐し給ひて 天の下
よろずよ いま たま あめ

申し給はね 朝廷去らずて
もを みかどさ

卷五—879

(解説) いつまでもかわることなく健やかにおいでになって天下の政治をお執りください。朝廷を決してお去りにならずに。

4 山上憶良は前記の大納言に昇任して都に帰る大伴旅人を送る歌に続いて「敢へて私の懐を布ぶる歌三首」と題して自分を都に早く呼び戻して欲しいとの願望を大伴旅人に述べる次の三首の歌が続く。

1) 天ざかる 鄙に五年 住ひつつ
あま ひな いつとせ すま

都の 風習 忘らえにけり
てぶり

卷五—880

(解説) 遠い田舎に五年間も住み続けているうちに、都の習わしをすっかり忘れてしまったことである。(私も都へ行きたい。との意)

* 「風習」とは習わしをいう。* 「鄙」とは田舎のことを言う。

・三首(卷五・880～882)の歌の左注には「天平二(730)年十二月六日筑前国司山上憶良謹みてたてまつる」となっており憶良が赴任した神龜二(725)年頃から数えると五年となる。

2) 斯くのみや 息づき居らむ

あらたまの 来経きへゆ往く年の

限り知らずて 卷五―881

(解説) こうしてため息ばかりをついでいることであろうか。

来ては過ぎ去って行く年がいつまで続くかすることもなしに。

「息づき」―ため息をついて「来経行く」―年月が過ぎてゆく。

3) 吾が主の 御霊賜ひて 春さ

らば 奈良の都に 召上げ給

はね 卷五―882

(解説) あなた様の御心入れを賜って、春になったらば奈良の都に 召し上げて下さいまし。

*「吾が主」―私の主 *「御霊賜ひて」―御心入れを賜って

(参考文献)

・日本古典文学大系　・梅林孝雄著「福岡県・万葉歌碑見て歩き」等

(写生地)　―福岡県大宰府市観世音寺

「遠の朝廷」と呼ばれていた大宰府・政庁跡(国指定特別史跡)を描

く。(池田杏花)

